慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	何とも爽やかな白井浩司さん
Sub Title	
Author	大久保, 洋海(Okubo, Yokai)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1982
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.44, (1982. 12) ,p.358- 360
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	白井浩司教授記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00440001-0358

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶応仏文科出身と云われていないのは残念です。

ところで、一九世紀末からの西欧の言語学の発展は慶応の仏文科にどの様に這入って来たでしょうか。仏文科自身についてだけ云えば全くゼロだったと云えるでしょう。私の在学中ソシュールの名も聞いた事はありませんでした。英文科では言語学の時間に Verner の法則の解説をする先生がありましたが、これはむしろ英語学の細い所に這入るので、仏文の者は余り聞きに行きませんでした。しかしこの時大変幸だった事は、西脇順三郎先生がヨーロッパの留学から帰朝されて、新しく言語学の講義を開始された事でした。私は既に卒業していて、講義に出席する事は出来ませんでしたが、二年下の高松義雄君のノートを借りてあとで読み、ソシュールやジュネーヴ学派の事蹟などを知り大変為になった事を覚えています。尚西脇先生は現在詩人の面のみが強調されていますが、実はすぐれた英語学者でその面が忘れられている様に見えるのは残念に思います。

さて、言語学のことは別にして、仏文科が伸びて行ったのは、やはり佐藤朔塾長、白井浩司学科長の力によるものですが、その外にどう云う方々のお名前を挙げなければならないかと云えば、名を得た人として、次のリストが出来ました（数字は卒業年）井汲清治（大正六）、横部得三郎（大正十三）、青柳瑞穂（大正十五）、高橋廣江（同）、斎藤吉彦（昭二）、高松 義雄（昭四）、吉川 静雄（同）、佐藤朔（昭五）、田中千禾夫（同）、蘆原英了（昭六）、北原由三郎（同）、大久保洋海（同）、佐野一男（昭七）、増田良二（昭七）、木内林太郎（昭八）、犬丸幹雄（昭九）、二宮孝顕（昭九）、丸岡 明（同）、白井浩司（昭十六）、芥川比呂志（昭十七）、堀田善衛（同）、朝吹三吉等

（元白百合女子大学教授）

何とも爽やかな白井浩司さん

大久保 洋 海

初めての出合いは、白井さんがまだ仏文の学生で、私が「銀座でふらんす語」などと、西銀座の一角に教室を

出し、街の教師をしていた頃のことである。
手引は、白井さんと同期の長谷川哲三さん（第一書房主、長谷川巳之吉氏息）であった。
何でもその頃、仏文の空気が沈滞して面白くない、心あるものはその打開が図りたい、内内で集って相談したいのだが適当な場所がないのでそれを足場のよい私の教室を貸してほしい、ということであった。
この一種の造反のリーダーが白井さんであった。彼の強い熱意に動かされた私が、快く申出を受けて応援に回ったことは言うまでもない。
グループはその後何回か集って話合ったが、結局白井さんが先頭になり、教授に忿懣をぶちまけ、改善をせまった。
体当りともいえるこの意志表示は、だらけた部内の空気を引き締め好ましい反響を齎した。そして戦後、佐藤朔さんが主任教授になってから、現在のような俊才の居並ぶ仏文ができたのだが、その礎は誰あろうこの白井さんの情熱が築いたといっても過言ではないと思う。

戦争末期の昭和十八年八月、私は海軍から嘱託として突然呼ばれ、急遽サイゴンに飛ぶことになった。
その時私は、銀座の教室をやりながら、在京フランス大使館の翻訳室でも働き、毎朝十時から午后一時までフランス人の翻訳官と一緒に、日本の外務省から来る候文の公文書の仏訳に当っていた。
赤紙にも等しいこの強制的な中断は、大使館当局を困惑させたが、その代役の相談を私から白井さんにもちかけると、彼は控目ながら応諾し、その特殊な仕事を見事に果してくれたのである。
急場を凌げ私はたいへん助かったが話はそれだけではない。大使館が好意で私に支給するのをやめない手当を毎月私の留守宅に届けるという戦時中にしては厄介千万なサービスまで引受けるのであった。
「鉄兜の白井さんが今月もお金をもって来て下さいました」
と海没して水に濡れ字も定かでない妻からの便りを読むにつけ、日毎に募る戦火でもはや飛行機は飛ばず船も

なく、帰国の望みも絶えた私の心は白井さんへの感謝に満たされるのであった。

感謝といえばまだある。

帰国後私は、佐藤朔さんや横部さんに温く迎えられて母校に帰る幸運を得るが、間もなく長いこと離れていた翻訳を再びやるようになった。しかし、出版界と遠ざかっている身には、たやすく本を出すのはむずかしい。

この時も白井さんは私の助けの神となった。

既に大使館に来た頃からJ＝ポウル・サルトルの「嘔吐」の邦訳を完成し、ジャーナリズムに顔が弘くなっていた白井さんは、私のまごついているのを見るとすぐ手を貸してくれた。

アラン＝フルニエの「ル・グラン・モーヌ」から最近のJ・ルナール（文庫本で、「にんじん」などはやがて十七版）に到るまで、白井さんの世話にならなかったものは一つもない。

二人で飲んだあるとき、私はしんみりその謝意を彼に述懐したことがあるが、相手は、戦争中私が大使館に紹介したことなどを先ず挙げて、私から謝辞をうける筋合いは一つもない、と言う。

近頃何とも爽かな人柄ではないか。

（本塾大学名誉教授）

白井さんと私

二宮孝顕

このたび白井さんが定年を迎えられるに当り仏文科の歩みをかえりみる時、長年にわたって中心人物として活躍され、多くの人材を育てられた功績にあらためて敬意を表したい。

白井さんに初めて会ったのはいつだったかはっきり覚えていないが、高橋広江先生に紹介された。その頃白井さんは大学を出たばかりで、フランス大使館に勤務されていたように思う。私の方はNHKの海外放送に従事し、昼間は時間の余裕があるので日吉の予科でフランス語を教えていた。高橋先生とはパリで一緒だったので親